

## 地域情報（県別）

### 【兵庫】希少がんセンター開設、2027年度新病院建設計画に先駆けて-藤田郁夫・兵庫県立がんセンター希少がんセンター長に聞く◆Vol.1

担当医師21人、各診療科の医師でチームを構成

m3.com地域版

兵庫県立がんセンター（明石市）は2023年10月、希少がんセンターを開設した。希少がんセンター長の藤田郁夫氏に希少がんセンターの概要、相談窓口の役割、医療連携への取り組みなどについて聞く。（2024年5月28日オンラインインタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回は[こちら](#)（近日公開）

## 整形外科医から骨軟部腫瘍専門医へ

——藤田先生は整形外科医でありながら、骨軟部腫瘍専門医として治療に携わるようになったとのことですが、その経緯について教えてください。

私の父親が整形外科医でした。父親の影響だと思いますが、けがや関節の問題で身体が動けない患者が手術によって劇的に回復し、元気に笑顔で退院する姿を想像し、整形外科医を目指しました。

当初は、骨折や人工関節分野に興味を持っていましたが、神戸大学整形外科に入局し、最初の指導医の先生のご専門が骨軟部腫瘍でした。その先生の前で研修を行い、骨軟部腫瘍に興味をもちました。

1994年からは、神戸大学大学院医学研究科に入学し、関節リウマチと軟骨細胞の分化の研究、1995年には米国クリーブランドクリニック留学で、膝前十字靭帯の再建の研究に携わりました。帰国後は民間病院で整形外科医として勤務し、10年ほど骨軟部腫瘍から離れていました。兵庫県立がんセンターに勤務してからは、再び骨軟部腫瘍専門医として治療に携わる機会をもらいました。



藤田郁夫氏

——骨軟部腫瘍専門医数は少ないのでしょうか。

日本整形外科学会認定の骨軟部腫瘍医の数は約200人であり、そのうち兵庫県には約10人が在籍しています。

骨軟部腫瘍の認定医制度は、2018年に日本整形外科学会によって開始されました。しかし、認定要件として、悪性骨軟部腫瘍10例を含む50例以上の骨軟部腫瘍の診療経験が必要であることや、がん治療認定医の資格が求められま

す。

また、骨軟部腫瘍は稀な疾患であり、一般的な病院では多くの症例を経験することが難しいです。さらに症例数が少ないため、専門医としての訓練を受ける機会も限られます。このため、骨軟部腫瘍の専門医を取得する医師はほとんどいません。

## 希少がん治療を知ってもらうために情報発信を強化

### ——希少がんセンターの特徴について教えてください。

当院の希少がんセンターは、2023年10月に開設しました。経験豊富な診療科、診断・治療部門などの専門家からなるチームが協力し、連携を強化して希少がんに対する最良の医療提供を目指しています。

また、希少がん診療ネットワークの構築や、希少がんの相談窓口を通じた患者支援、希少がん臨床試験の推進など、多岐にわたり取り組んでいます。

スタッフ構成は、各診療科の医師が21人、看護師は3人で、うち2人はがん支援センターと緩和ケアセンターとの兼任です、その他コメディカルを含め約30人のチームで成り立っています。希少がんセンターは診療科ではありませんので、希少がん患者の診療は、各診療科で行っています。

### ——希少がんセンターの開設に至った経緯を教えてください。

兵庫県立がんセンターでは、2027年度を目標に新病院の建設を計画しています。2022年に厚労省より「がん診療連携拠点病院等の整備に関する指針」が発表され、その中で希少がんや難治がんの対応を行う体制が認定要件に盛り込まれました。この指針を受けて、新病院の機能整備に先駆けて、希少がんセンターの設立が適切だと判断しました。

また、当センターの各診療科では従来から希少がんの診療に力を入れており、ホームページでも希少がんの症例数を公表しています。そのため希少がん治療について多くの方に知ってもらうために、情報発信の強化が必要と判断しました。

希少がんセンターの開設により今後、希少がんに対する早期の的確な診断や有効な治療法の確立が期待されます。

### ——兵庫県立がんセンターにおける希少がんの診療実績を教えてください。

院内がん登録より集計した2018～2022年の実績ですが、脳・脊髄領域（脳腫瘍、神経膠腫、悪性リンパ腫など）は約80例、頭頸部、口腔領域（嗅神経芽細胞腫、腺様嚢胞がん、聴器がん、頭頸部の肉腫、口腔がんなど）が約370例です。

乳腺領域（男性乳がん、特殊型乳がん、乳腺悪性葉状腫瘍など）は約170例、呼吸器、縦隔領域（悪性胸膜中皮腫、胸腺腫・胸腺がん、胸部のSMARCA4欠損腫瘍、肺神経内分泌腫瘍など）が約150例です。

消化管領域（悪性腹膜中皮腫、肛門がん、肛門管扁平上皮がん、小腸がん、GIST、消化管神経内分泌腫瘍、神経内分泌がんなど）は約150例、肝・胆・膵領域（膵神経内分泌腫瘍、神経内分泌がん、混合型肝がん、退形成膵がん、膵腺房細胞がんなど）が約20例です。

内分泌領域（褐色細胞腫、パラガングリオーマ、副腎皮質がんなど）は約10例、婦人科領域（子宮の肉腫、子宮がん肉腫、子宮内膜間質肉腫、子宮平滑筋肉腫、膣がん、腹膜がんなど）が約150例です。

後腹膜領域（後腹膜の肉腫など）は約10例、皮膚領域（悪性黒色腫、基底細胞がん、汗腺がん、脂腺がん、乳房外パジェット病、皮膚血管肉腫、皮膚付属器がん、メルケル細胞がん、有棘細胞がん、肛門がんなど）が約770例です。

骨と軟部組織領域（体幹の肉腫、軟部肉腫、デスモイド腫瘍、骨の肉腫など）は約170例、悪性リンパ腫領域（悪性リンパ腫、眼内リンパ腫、眼付属器リンパ腫、中枢神経系原発悪性リンパ腫など）が約480例です。

また、複数にまたがる領域として、原発不明がん約40例、AYA世代がん約840例、神経内分泌がん(肺除く)約20例、神経内分泌腫瘍(肺除く)約60例、腺様嚢胞がん約10例、胚細胞腫瘍約30例、パラがんグリオーマ約10例です。

## 希少がんに対する相談窓口の重要性とは

——希少がんの相談窓口を希少がんセンター開設と同時期に設置されたのですね。

兵庫県立がんセンターでは、従来からがん相談支援センターがあり、その業務の一環として2023年10月に希少がんセンター開設時に希少がん相談窓口を設置しました。相談窓口を設置した理由は、希少がんの患者やその患者の主治医にとって希少がんの情報、特に治療法や診療ができる施設、診療実績などの情報が乏しく、どこに相談すればよいのか分からない現状があったからです。

また、国立がん研究センターや大阪国際がんセンターが希少がんホットラインに力を入れていることを受けて、希少がんセンターでも重点的に整備することにしました。希少がん相談窓口には、がん専門相談員として看護師を中心に、医師、薬剤師、医療ソーシャルワーカー、栄養士、臨床検査技師などの医療チームで対応しています。

相談者が希少がんについて知りたい場合や、診断から治療、その後の療養生活、さらには社会復帰と、生活全般にわたっての疑問や不安を感じた場合にいつでも相談できる体制を整えています。

——希少がん相談窓口での医師の役割を教えてください。

まず、がん専門相談員である看護師が相談者の内容を確認します。その後、看護師は希少がんセンターの担当医師に情報の照会、対応を相談し、相談者に回答しています。医師は主に希少がんの診断や治療法、当センターの治療実績、診療の可否などの情報を提供しています。

その結果、当センターでの診療やセカンドオピニオンを希望される場合は、診療やセカンドピニオン予約を地域連携室を通してとっていただくよう相談者にお伝えしています。

——希少がん相談窓口の相談件数を教えてください。

2023年10月～2024年3月までは6件の相談件数でした。2024年4～5月は4件の相談があり、2024年度は若干増加すると考えられます。

——希少がんセンターの今後の課題について教えてください。

相談件数がまだ少ない状況です。ホームページや地域連携、市民講座などを利用して、認知してもらう必要があると感じています。

希少がんセンターではネットワーク連携がまだ十分に進んでいません。国立がん研究センターが希少がんネットワークの中央機関としてネットワーク構築の整備を開始しています。このネットワークには、各地域に希少がん中核拠点センターが設置され、大阪国際がんセンターが関西地域の拠点となっています。

今後は国立がん研究センターや大阪国際がんセンターと希少がんの治療やホットラインなどについてさらなる連携をとりながら、兵庫県内のがん拠点連携病院とも連携をとっていく予定です。

◆藤田 郁夫（ふじた・いくお）氏

1991年徳島大学医学部卒業後、神戸大学整形外科入局。1995年米国クリーブランドクリニック留学。1997年神戸大学大学院医学研究科修了。1997年姫路聖マリア病院。2001年兵庫県立成人病センター（現兵庫県立がんセンター）。2004年愛仁会高槻病院。2006年兵庫県立がんセンター整形外科、2023年同センター希少がんセンター長就任。日本整形外科学会専門医・骨軟部腫瘍医・脊椎脊髄病医、日本がん治療認定医機構 がん治療認定医。

【取材・文＝田中 嘉尚（写真はセンター提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索



## 地域情報（県別）

### 【兵庫】AYA世代がん患者数は5年間で800人以上-藤田郁夫・兵庫県立がんセンター希少がんセンター長に聞く ◆Vol.2

治療方針決定に粒子線医療センター、神戸陽子線センターと合同カンファ

m3.com地域版

兵庫県立がんセンター（明石市）は、希少がん患者の治療方針の決定に各診療科でカンファレンスを行っている。またAYA世代（15～39歳）のがん対策など、幅広い世代に目を向けた対策を講じている。希少がんセンター長の藤田郁夫氏に希少がんセンターにおけるカンファレンスやAYA世代がん患者の取り組みについて聞いた。（2024年5月28日オンラインインタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回は[こちら](#)

## 「肉腫・骨転移カンファレンス」を毎週1回開催

——兵庫県立がんセンターは、各診療科でカンファレンスを行って治療方針を決定しています。希少がんセンターでも行っていますか。

希少がんセンターでは、私が専門にしている肉腫や消化器領域の高分化型神経内分泌腫瘍（NET）などに特化したカンファレンスを行っています。

整形外科のカンファレンスで、2015年に「骨転移カンサーボード」を立ち上げ、その後、肉腫も対象として毎週1回開催していました。2023年10月に希少がんセンターを開設後は、「肉腫・骨転移カンファレンス」の名称で骨軟



部などの肉腫も対象にしてカンファレンスを行っています。



藤田郁夫氏

——「肉腫・骨転移カンファレンス」に参加しているスタッフの人数を教えてください。

兵庫県立がんセンターと県立粒子線医療センター、神戸陽子線センターの3施設で合同カンファレンスを行っています。兵庫県立がんセンターの参加者は、整形外科医が4人、腫瘍内科医3～5人、放射線治療医3～4人、放射線診断医1人、病理診断医1人、コメディカルでは理学療法士が4人参加しています。県立粒子線医療センター、神戸陽子線センターはオンラインで数人参加しています。

——県立粒子線医療センター、神戸陽子線センターの医師が「肉腫・骨転移カンファレンス」に参加する理由を教えてください。

手術や化学療法が難しい症例の場合に粒子線治療を検討するためです。例えば、骨盤や脊椎などの手術が難しい部位にできた肉腫に対しては、粒子線治療が第一選択となります。カンファレンスでは、粒子線治療に適しているかどうかを、画像を見ながら検討しています。

## 2023年、AYA世代サポートチームを立ち上げ

——希少がんの中でもAYA世代のがん患者が多いと言われていますが、兵庫県立がんセンター内でのAYA世代のがん患者数を教えてください。

AYA世代のがん患者数は、2018～2022年の5年間で約840人です。特に乳がん、子宮がんが多いですが、肉腫や血液腫瘍、脳腫瘍も含まれます。

——AYA世代のがん患者のサポートで取り組まれていることは何ですか。

兵庫県立がんセンターでは、2023年にAYA世代サポートチームを立ち上げました。このチームは、腫瘍内科、整形外科、婦人科などのがん治療に携わる医師と、さまざまな職種のスタッフで構成されています。

このチームでは、AYA世代がん患者の治療継続、さまざまな意思決定、サバイバーシップなどのサポートを行っています。具体的には、教育支援、就労支援、妊孕性温存療法などに関する情報提供を行っています。

また、兵庫県立がんセンターには小児科がありませんが、近畿ブロックの小児がん連携病院として、必要に応じて兵庫県立こども病院をはじめとする専門病院と連携し、AYA世代がん患者の診療に対応しています。

——AYA世代サポートチームを立ち上げた経緯を教えてください。

AYA世代のがん患者は就学、就労、友人関係、恋愛、結婚、出産など、多くの重要な岐路があります。中には、小さな子供を育てたり、介護が必要な親を抱えたりするケースもあります。

こうしたライフステージでがんを患うことは、患者や家族にとって非常に受け入れがたく、多くの課題が伴います。このため、AYA世代のがん患者に対する支援の重要性が、近年、社会的に広く認識されるようになりました。

この状況を踏まえ、AYA世代のがん患者に対する多面的な支援が急務と考えました。AYA世代のがん患者を支えるためには、医師や看護師をはじめ、地域の医療者、生殖医療者、教育者、職場の関係者や産業医、行政担当者など、さまざまな人々の連携が必要です。また、ホームページやSNSを通じて、AYA世代のがんに関する正しい情報を多くの人に伝えることも重要です。

このような背景から、AYA世代のがん患者が直面する多様な課題に対し、包括的で継続的なサポートを提供するためのAYA世代サポートチームを立ち上げました

#### ——AYA世代サポートチームの今後の予定を教えてください。

AYA世代のがん患者をサポートする全国的なさまざまなネットワークに参加しています。例えば、毎年3月にAYA weekという啓蒙週間が、社会のさまざまなステークホルダーにより展開されており、2024年は、当院希少がんセンターのメンバーも、お揃いのチャリティーTシャツを着て、応援メッセージを込めたフラッグを皆で掲げ、その様子がYouTubeで配信されました。

今後も、このようなさまざまなAYA世代支援に関する活動に、兵庫県立がんセンターの職員は、積極的に参加していく予定です。

#### ——希少がんについて最新の診療に関わることがあれば教えてください。

希少がんセンターでは、2022年6月から消化器内科が主体となり、放射線診断・IVR科、放射線治療科の協力のもと、NETに対する核医学治療（ルタテラ療法）を積極的に行っています。切除不能のNETに対しては、ルタテラ療法が比較的副作用も少なく、従来の治療に比べ高い有効性が期待できる治療です。

兵庫県内でこの治療を受けられる施設が少ないため、当センターで対応可能であることをホームページなどで情報発信もしています。2023年5月は6例、2024年5月は10例の患者にルタテラ療法を導入しており、2024年6月には2

例新規導入予定です。

また、ゲノム医療にも力を入れています。特に希少がんは標準的な治療法が確立されていない場合が多いため、遺伝子パネル検査を行い、有効な治療薬、臨床試験情報を探して治療に活用しています。

### ——最後に兵庫県の医師に対しメッセージをお願いします。

日常診療で希少がんの患者を担当する機会は決して珍しくないと思います。なぜなら希少がんは約200種類も存在し、全ての希少がんを合わせるとがん全体の10～20%を占めているからです。

診療の問題としては、希少がんの患者が来院されたときに診断が難しい、治療方法がよく分からない、どこで治療ができるかが不明といったさまざまな課題が生じることが多いです。そういったお困りの時には、まずは当センターをご利用いただき、希少がんの診療に役立ててもらえればと思います。

#### ◆藤田 郁夫（ふじた・いくお）氏

1991年徳島大学医学部卒業後、神戸大学整形外科入局。1995年米国クリーブランドクリニック留学。1997年神戸大学大学院医学研究科修了。1997年姫路聖マリア病院。2001年兵庫県立成人病センター（現兵庫県立がんセンター）。2004年愛仁会高槻病院。2006年兵庫県立がんセンター整形外科、2023年同センター希少がんセンター長就任。日本整形外科学会専門医・骨軟部腫瘍医・脊椎脊髄病医、日本がん治療認定医機構 がん治療認定医。

【取材・文＝田中 嘉尚（写真はセンター提供）】

記事検索

ニュース・医療維新を検索



